

『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』

ロバート・D・パットナム著・柴内康文訳

食料・環境領域 主任研究官 林 岳



『孤独なボウリング
米国コミュニティの崩壊と再生』

原著: Robert D. Putnam (2000)
"Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community" New York: Simon & Schuster

著者/ロバート・D・パットナム
訳者/柴内康文
出版年/2000
発行所/柏書房

米国では、今年1月にドナルド・トランプ氏が大統領に就任しました。トランプ大統領は、かつて米国が国際的に強力なリーダーシップを執り、絶対的な存在として世界に君臨していた時代をもう一度取り戻すべく、大胆な政策を打ち出そうとしています。

今回ご紹介する著書は、このように米国が強大な力を世界に誇っていた20世紀後半にかけて、米国国内でソーシャル・キャピタルがどのように変容してきたのかを詳細に分析したものです。ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）とは、人と人のつながりのことを指し、良い意味では「人脈」、「絆」のことで、悪く言えば「コネクション（コネ）」、「しがらみ」のことです。本書のタイトルは、ミシガン州に住むアンディ・ボシュマが、ボウリングの地域リーグで知り合ったジョン・ランバートが腎臓移植待機リストに載っていることを知り、自らの腎臓の1つを提供すると申し出るというまさに「絆」を象徴する話に由来しています。

著書では、米国において1950年代から90年代までの約半世紀の間に、米国におけるソーシャル・キャピタルとその形成に貢献してきたコミュニティがいかに減退し、人々のつながりが薄れてきたのか、そして、それがどのように再生されつつあるのかを著者自らの詳細な調査研究によって明らかにしています。分析対象は、教会の集会への参加といった宗教参加、選挙投票などの政治参加、PTA活動などの教育参加から、ボランティア、互酬性、他愛主義など非常に幅広くなっています。これら1つ1つのテーマについて過去からこれまでの間に、参加者数や割合、そして具体的な活動内容について、必要なデータを示しつつ、どのように変化してきたのかを示しています。例えば、教会に行く人の割合が1950年代終盤から90年代終盤にかけて約1/3ほど低下

したことや、労働組合の所属率が1950年代をピークに90年代までほぼ一貫して低下してきたことを指摘しています。さらには、このようなソーシャル・キャピタルの変容がなぜ起こったのか、ソーシャル・キャピタルの変容によってどのような影響が社会に生じるのか、今後ソーシャル・キャピタルを再生するためには、どのような方策が考えられるのかについても論じています。

この他、インターネットを介したつながり、いわゆるコンピューター・コミュニケーションについても分析がなされており、コンピューターを介したつながりが直接的な対面コミュニケーションとどう違うのかなども紹介されています。例えば、コンピューター・コミュニケーションでは、対面コミュニケーションと比べて、共有する問題の知的理解に到達することは早いですが、合意を達成することが困難で、連帯感を感じるものが少ないと主張しています。

本書は、米国でもベストセラーになるほどの名著であり、社会心理学やソーシャル・キャピタルを勉強・研究する者にとってはバイブル的な存在です。本書は、700ページ近いボリュームがあるうえ、訳も直訳に近いところもあり、少々難解な面がありますが、これ1冊を読み解けば、米国が栄華を誇った時代から20世紀末まで、米国民のソーシャル・キャピタルがどのように形成され、変化してきたのかをよく理解することができると思います。